

カトリック 仙台教区報

2010年3月7日 No.192
 発行
 カトリック仙台司教区
 980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
 Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
 発行 任 広 報 委 員 会
 URL <http://sendai.catholic.jp/>

幼児の祈りに思う

仙台司教区司教総代理 梅津 明生

年頭司教書簡の、この一年を『祈りに心を注ぐ一年』としたいという提案に応じて、祈りについて幼児教育に関わっている立場から、感じていることを書いてみました。

仙台教区内にはカトリックの保育園と幼稚園を合わせれば58園あります。どの保育園でも幼稚園でも、毎日の祈りを大切にして子どもの心を育てようとしています。

人間は、神にかたどって創造されています（創1・27）から、子どもたちが将来、健康な心、愛する心をもった大人に成長してくれることを願って保育者は子どもたちと接しています。

愛する心からは自然に祈りがわき出て来ます。愛する心がなければ祈りは生まれてきません。愛する心がない祈りは形だけの空しい祈りになってしまいます。愛する心から祈りが生まれ、祈ることによって愛する心がさらに育っていきます。

子どもたちが、心を込めて祈れるようにするためには、祈りへの招きの言葉は大切です。祈る心への導入として、保育者は子どもたち



聖ウルスラ学院英智幼稚園

の周りに目を向けさせ、たとえば、今日からだの調子を崩して登園できなかった子どもの様子、寂しいことなどをお話すると、子どもたちは、お友達が早く元気になって登園し、みんなと楽しく遊ぶことが出来るようになって欲しい

いという願いから、祈る心が準備されます。

また、災害などで大きな苦しみの中にいる人々のことなどをやさしい言葉で話すと、元氣を出してほしいという願いが心に浮かんで祈ることによって、私たちの心は神の心に引き寄せられ、神のみ旨を生きるように少しずつ成長していくのです。

子どもたちの祈りへの動機づけは、家庭のことや園のことなど身近なところから始まります。大人である私たちにとっても、自分自身を振り返ったり、周りを見たりするとき、祈りの糧となるものがたくさんあります。ときには「祈れないのです。愛せないのです」という心の叫びも神への祈りになります。

神にかたどって創造された人間に、神は限らない愛をお与えになり、ご自分の独り子の存在のすべてを賭けて私たちへの愛を示してくださいました。私たちはこの限りなく大きな神の愛に、日々の祈りを通して応えながら歩んでいきたいものです。

生命の泉

▼寒さが和らいでくる頃ご復活が近くなる。各教会では聖週間の時間を決めたり十字架の道行や黙想会などご復活の準備を始める。これらの年中行事のようなことでも恒例として準備することが大切だ▼第2バチカン公会議で「復活秘儀」ということが言われ、その成果が私たちの信仰生活にも次第に影響をもたらすようになったように感じる。例えば、十字架の道行は15留になり、正面の十字架は復活のイエス像になった。昔、十字架上で亡くなられたイエス様は茨の冠や、手や脇腹・足から血が垂れるという生々しいものだった。このような十字架は、私たちに回心を迫ってきた。ところが白い衣の復活のイエス様からは救いが完結したというメッセージは伝わるが「悔い改めよ」と叫ぶ声は聞こえにくくなった様に感じる▼中世ヨーロッパに始まった四旬節の信心に茨の冠をかぶって体に釘を刺して十字架を担ぐような苦行がある。このイベントには、マグダラのマリアを守護の聖人として仰ぐことが多かったそうだ。「罪の女」が回心してイエスの十字架と死と葬りを見届け、そして誰よりも早く復活の主に出会い使徒たちに知らせに走った。回心して復活の喜びにつないだ聖女は四旬節に取り次いで欲しい聖人だ。

「仙台教区年！」

「75年の感謝と希望を持ってこれからへ」

2011年、仙台教区は75周年を迎え、函館教区時代から数えると120年となることから、それを記念して、神に感謝し、その恵みと導きに希望を置く1年にしよう（教区報190号2頁参照）その準備委員会が発足し、2月20日、第4回目の会合が持たれた。写真。

正式な名称を「仙台教区年！」、サブテーマを「75年の感謝と希望を持ってこれからへ」とし、聖



望を持ってこれからへ」とし、聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日・仙台教区司教座教会献堂記念日に一番近い2011年7月3日（日）の開会ミサから、2012年7月1日（日）の閉会ミサで終了する。



祈りの質や量

司教 マルチノ平賀徹夫

2月17日の灰の水曜日から四旬節に入りました。そのミサの第一朗読は旧約聖書『ヨエル書』からで、「主よ、憐れんでください。あなたの民を恥に落とさず、国々の嘲りの種としないでください。『彼らの神はどこにいるのか』となぜ諸国の民に言わせておかれるのですか」との叫びが読まれました。四旬節の中心テーマは「回心」です。ただそれは、自分の悪さを糾明し反省する内向きの個人的な悔い改めではなく、信仰による神への信頼を基に「主よ、あなたはその力がおあります。あなたのお心を第一にして生きる者となるようにわたしたちを変えてください」と、共に主に心を向ける叫びなのではないか、と思いました。

今年の年頭書簡に「祈りに心を注ぐ」として、「祈りの質や量への思いを深め、互いのために祈りあう」ことを呼びかけました。マタイ福音書で主の祈りが与えられるときのイエス様のお言葉は「主よ、あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」と先ずあり、「だから、こう祈りなさい」と続き、「御心が行われますように」と教えられるわけです。この究極の形はゲッセマネの園でのイエス様ご自身の祈り、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく御心のままに行ってください」にあらわれます。

しかし、しかしです。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい（ローマ12:15）」とありますが、毎日の暮らしの中で、行き詰まりや病気、大変な苦境など、辛い苦しい悲しいことがいろいろ起こりますし、そのようなときは当然、皆、叫び声を上げます。「苦しみと嘆きを前にして主の御名をわたしは呼ぶ。『どうか主よ、わたしの魂をお救いください』（詩116:3、4）」とある通りです。このような叫びを神の民としてわたしたちは、どれだけ共感・共有しあえるのでしょうか。「イエス様は『わたしの願いではなく、御心のままに』と祈られたのだから、あなたもそうお祈りして乗り越えなさい」と励ますことで十分でしょうか。

われた。

*教区としての連帯感（一致）を深めたい。*人と人とのつながりを深め、互いに理解し合えるように。*神と共に旅をしている私たちにの一体感を感じられるようにしたい。*次の時代の教区を担う子どもたちや若者を大切にしたい。*歴史を知ることから、現代の教会が抱えている諸問題に目を向けよう。*希望を持って、

明日に向かい、元気になろう、等の意見が交わされた。

さらに、教区年のうた、教区年の祈り、教区年のシンボルマークを公募により設定すること。教区報や、教区のホームページで、教区年の意識を喚起することなどの案が出された。これらについては、3月の宣教司牧評議会に報告し、承認を得て正式に教区全体に告示される予定になっている。

【司祭異動】（一）前職・前任地
教区本部

梅津明生 仙台中央地区協力を解く（司教総代理 仙台中央地区協力兼任）

岩手県

佐藤 修 盛岡地区担当、花巻教会主任兼任（花巻教会、北上教会主任兼任）

佐藤 守也 一関教会、千厩教会主任兼任（一関教会、千厩教会、水沢教会主任兼任）

高橋 昌 北上教会、水沢教会主任兼任（白河教会、須賀川教会主任兼任）

マルコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ 宮古教会主任（盛岡地区担当）

宮城県

ホセ・ゴンザレス 仙台中央地区担当（グアダルーペ会管区本部）

司教日程

3・4月

- 3・2 ④ 八戸聖ウルスラ学院
- 3 ③ 青森明の星高校
- 4 ④ 聖ウルスラ修道会管区総会
- 5 ⑤ 7 部落差別人権委・春季会宿
- 9 ⑥ 司祭評議会・司祭団役員会
- 11 ⑦ 部落差別人権委・事務局会議
- 12 ⑧ 教区財政問題評議会
- 13 ⑨ 桜の聖母短大卒業式
- 14 ⑩ 教区研修会・青森（八戸）
- 17 ⑪ 人権を考える委員会
- 19 ⑫ 仙台白百合女子大学位記授与式
- 21 ⑬ 元寺小路教会・教区学校懇談会
- 22 ⑭ 宣教司牧評議会・定例会
- 23 ⑮ 学法律事会、宗法責任役員会
- 25 ⑯ 田島カトリックの星幼・落成式
- 27 ⑰ 聖ウルスラ修道会・終生聖願式
- 28 ⑱ 受難の主日
- 31 ⑲ 聖香油ミサ
- 4・1 ⑳ 主の晩餐
- 2 ㉑ 主の受難
- 3 ㉒ 復活徹夜祭
- 4 ㉓ 復活の主日
- 9 ㉔ 社会司教委員会
- 11 ㉕ 宮城県南（大河原教会）
- 29 ㉖ 盛岡ドミニカン修道院
- 30 ㉗ 仙台正平協 集会

福島県

田中 丈夫 白河教会、須賀川教会主任兼任（福島県南協力）

教区外へ

フェリペ・クエバス グアダルーペ会管区本部（宮古教会主任）

ユン・ヨオク テジョン教区へ帰任（一関教会、千厩教会、水沢教会協力）

1月25日発表、発令は4月1日

教区の現状を知り、積極的な協力を

岩手県 教区研修会

2月11日(木) 15時、四ツ家教会(盛岡市)で開催された仙台教区研修会が熱気のうちに閉会した。

参加者は7名(司教、司祭7名を含む)、岩手県地区が苦手とする分科会による分ち合いも昨年に引き続き行った。

10時30分から平賀司教の講話「教区の現状と積極的な協力」では信徒数、洗礼数、司祭修道者数、教会維持費が右肩下がりで減少している厳しい状況の説明と新教会法典第Ⅱ集「神の民からすべての



私に参加した⑤教会の将来を

「神学校に行ってみないか」

十和田教会司祭 佐々木 博



福島県立原町高等学校の三年生

のとき、原町教会を公式訪問なさった小林有方司教さんと初めてお会いしたときです。「君のこれからの

招きにこたえて

27

に留学し、初代仙台教

大を考えています」とお答えする、「君、上智に入ってみないか。そうすれば、神学校にも入学できるし、チャンスがあれば、外国にも留学できるよ」と。そして、司教さんは、やさしくおっしゃ

キリスト信者の義務及び権利」について話された。

11時50分から司教の講話を受けて①ミサをより深く味わう、②社会との関わりを考える、③子供のことを考える、④信仰を分ち合う、⑤教会の将来を考えるーの5つのテーマ(事前に各教会に講話の資料を配布し希望する分科会を決めて申込してもらいました)で9分科会(1グループ/10名程度)

に分かれて、昼食を挟んで2時間程分ち合いを行った写真。

私が参加した⑤教会の将来を

いました。「よく黙想して決めたさい。もし、決心がついたら仙台の司教館を一度訪ねなさい」と。

その後、東京カトリック神学院の哲学院から、毎日すぐ近くの上智に四年間通いました。

チャンスが巡ってきて、オタワ

区長であられたルミュー大司教様から司祭に叙階されてから、間もなく金祝です。

司祭召命は、全く予期しなかった恵みです。この恵みに生涯かけて、日々応えていきたいです。

考える分科会では皆さん率直に話され、同じ悩みを抱えていることを実感した。同席したフェリペ神父(宮古教会)の「キリストを中心にする、その上で自分が変わらなければ共同体は変わらない、共同体が変わらなければ教会も変わらない」、「教会は建物ではないよ!」との発言は教会の将来を考える核心であった。

14時から平賀司教司式によるミサがあり、説教の中で研修会の締めくくりをしていただいた。

宮城県 教区研修会

今年度の宮城県研修会は2月13日(土) 13時から宮城県教会連絡協議会の主催で元寺小路教会大聖堂を会場として開催され約140名が参加した。

県連会長の猪岡光氏(西仙台)より今回の研修会の目的などの説明を加えたあいさつに続いて平賀司教の約1時間に及ぶ基調講演があった。

「教会とは何か」「秘

跡とは何か」について触れられた後、仙台教区の



現状について、小教区数の問題、洗礼者数の動向、司祭数の減少や教区等が行なっている事業について、さらに、事前に配布した資料を基に教会をどのように維持していくのかについて話された。

さらに「教会と交わりを持つこと、聖なる生活を送ること、宣教に努めることを義務と考えてくださいます。それと同時に、必要な負担に応じることも義務です。私たちが教会なのだという意識を持つことが大切だと話をしめくくった。

その後、資料に基づいて山田務氏(畳屋丁)から、県内各教会のミサの状況や教区内がどのような組織で活動しているのかについて補足説明が行なわれた。

引き続き、小教区や地区の発表があり、県北地区の石巻教会・県南地区の大河原教会・北仙台教会・塩釜教会・仙台中央地区の各代表者が、それぞれの現状について話した。

発表終了後、参加者から提出さ

れた質問用紙を基に、平賀司教や各発表者からより具体的な回答をいただいた。

今回の研修では、配られた資料の数字から得られる情報だけではなく、そこに隠れている仙台教区の現

状も良く理解して欲しいとの発言があり、今回の研修が締めくくられた。

今回は参加者全員が仙台教区の現状について認識を深めることのできた研修となった。

(畳屋丁教会 原 尚幸)

4月から仙台教区に神学生誕生

【皆様のお祈りを願っています】



私は、今年4月からカトリック神学院で司祭になるための勉強を始める佐藤彰洋と申します。出身教会は郡山教会です。

私は郡山ザベリオ学園の幼・小学校の卒業生で、洗礼は小学生の時に、堅信は中学生の時に受けました。大学生になり、郡山から千葉県に移り、それから教会から離れていました。その後、就職で郡山に戻って働き始め、また教会に行きたいと思いミサに出るようになりました。

私が洗礼を受けた時に勉強を教えて下さったシスターと再会し、勉強会に参加するようになりました。それから少し経って、仕事を辞めることになり、次の仕事を考えたときに、このまま就職するのは何か違うと感じ、迷っていました。そのことで神父様やシスターに相談に乗ってもらう中で司祭になりたいと思うようになりました。いちばん身近にいた神父様が、神様をとても愛していると仰っておられたのに惹かれたのかも知れません。

そんな神父様に憧れ、自分もそう言えるくらい勉強し、働きたいと思いい、神学院を受験しようと考えました。

神学生生活の中で、皆様方の教会に行くこともありますが、そのときは声をかけていただけると嬉しいのです。

どうぞよろしくお願い致します。

「祈りに心を注ぐ一年」の分かち合い①

今年の年頭書簡で平賀徹夫司教は、「『祈りに心を注ぐ一年』で信仰共同体作りを」と題して、個人で、家族で、共同体で祈ることを呼びかけています。特に、あの人、この人のためと、顔を思い浮かべて祈るよう勧められています。これを受けて、「仙台教区報」では「祈り」をテーマに紙上での分かち合いを継続していきたくて考えています。教区の皆様の投稿をお待ちしています。

「歩くこと、祈ること」

サンティアゴ巡礼路にて

いわき教会 高野幸子
2年前、私はサンティアゴ巡礼路を歩いて旅する機会を与えられました。どうして旅を始めたかは明確ではないが、この路を歩きたいと強く心に浮かびました。

今振り返ると、情報も少なく語学もまったくダメな自分が勢いで行ってしまった無謀な旅でした。約10キロの荷物を背負い、毎日約20km歩く。歩いて3日目、両足に何個もマメができ、痛み止めを飲みながら歩いた。歩いている中で何度も「神様助けてください」と心に思い、泣きそうになったり、歩くのをやめて帰ろうとも思いました。

そんな中でも歩き続けられたひとつは、巡礼路で会った司祭、修道者、お世話になった巡礼宿の人々でした。皆さん外国の見知らぬ人のために祈り、励まして、宿のお世話をしてくださいました。また町や村を訪れるたび教会で祈り、ミサに参加させて頂きま



サンティアゴ巡礼路にて

した。そこで出会うイエス様の姿は時に生々しいほど苦しみを受けている姿でした。その姿を見るたびに、イエス様は私たちのためにこんなに苦しみを受けたのに、

さ、敬虔な姿を見せてくれることで語りかけていたと思います。そして歩くことが自分の中でひとつの祈りになっていました。

いつしか足の痛みは歩くうちに癒え、膝等の故障も無く約400km、40日間の旅を終えることが出来ました。あれほど歩くことがつらいと思った日々だったので、サンティアゴが近づくにつれ、この巡礼が終わらないで願っていました。

日常に戻った今でも距離は短いです。歩くようにしています。その時には自然とイエス様に語りかけ、祈る自分がいます。そしていつまでも旅で出逢った人々を思い出し、感謝し祈ることを忘れないようにしていきたいと思っています。

今年は聖ヤコブの年で、多くの人がサンティアゴの旅をすると思います。巡礼者を支えるすべての人々に神様の恵みがありますように願っています。

新しい「主の祈り」の唱え方

北仙台教会 京野 啓子

第32回聖霊による刷新東北大会が10月23日から25日まで茂庭荘にて、赤波江謙一神父(聖パウロ会)を講師とし、「主よ、祈りを教えてください(ルカ11・1)あなたの道を歩みたい」をテーマに約60名の参加者があった写真。

<エネルギーを大切に>



今、地球温暖化が心配されています。世界中でのエネルギー消費量が年々増加し、多くは石油、石炭などの化石燃料によるもので、燃焼により生成する炭酸ガスが温暖化の主な原因と考えられています。

化石燃料はこれまで太陽から地球に降り注がれてきた莫大なエネルギーの一部が数千万年という時間の中で地球内部に蓄えられたものであり、それを今、一気に消費していることになります。

一方、地球は四六時中太陽エネルギーを得ており、その総量は、世界の年間エネルギー消費量の1万倍にもなると計算されます。このエネルギーを上手に利用できればエネルギーに困ることはないはずですが、なかなかそうはいきません。

教皇教書に再三触れられていますように、自然界に対して、人間はその知恵を生かし、多くの工夫によって人類の繁栄に欠かせない環境を守ることが求められています。

エネルギーは人類生存の基本です。エネルギーを無駄なく上手に利用すること、また、そのための知恵と工夫の努力が求められます。地球を大事にする会 松永利昭(元寺小路教会)

同神父は「主の祈り」についての照らしを受けたという。それはこの祈りの新しい唱え方だった。「主の祈り」は自動的にまた習慣的に唱えがちだが、この新しい祈り方は一つ一つの祈りを一日の生活の中に、ロザリオの珠のようにバラの花のように散りばめるといえる。この「主の祈り」を最初から最後まで唱えなくとも、例え



ば「み国が来ますように」を繰り返して唱えることでも、「主の祈り」を唱えることになる。自分の心の動きに気づいたときには、いつでも、どこでも、何度でも唱える。また主の祈りの一つ一つの祈願の意味について説明がなされ「主が教えてくださいました祈りだから力がある」との師の言葉を参加者は心に刻んだ。

【編集部から】

「祈りの分かち合い」への投稿は教区本部事務局 広報委員会へ郵送・FAXでお送りください。

Eメール makawai@yahoo.co.jp
掲載の有無、順番は編集部にお任せ下さい。

「教皇様への列福感謝の公式巡礼団」に参加して

一本杉教会 川田 治邦

ペトロ岐部と187殉教者列福一周年を記念して、教皇様へ福者の聖遺物の顕示台を奉納し、感謝の意を表するため、岡田武夫大司教（東京大司教区）を団長に、高見三明大司教（長崎教区）、大塚喜直司教（京都教区）、押川寿夫司教（那覇教区）、菊地功司教（新潟教区）、溝部脩司教（高松教区）、地主敏夫名誉司教（札幌教区）と、

信徒ら170名
ほども、8グループに分かれて巡礼の旅に出発した。

私と妻は、11月22日出発の溝部司教が同行するグループ（総勢39名）に参加した。



で行われた。

日本の巡礼団は、前から4列目以降のかなり前の良い席が予約されていた。教皇様が現れるまで、2時間ほど待ち時間があつたが、各国からの巡礼者が、教皇様にアピールしようと、コーラスや、ブラスバンドの練習をしており、それらを眺めていたので、退屈することもなかった。

教皇様は、ステージ左から、静かにゆっくりと、穏やかに両手を

ハンセン病問題を考える③

1月16〜17日、富士山の麓にある駿河療養所のフィールドワークに参加しました。

これは駿河療養所の歴史を残すための集まりで、2006年に開催された「第1回ハンセン病を知りたい青年交流会」で駿河療養所をきつかけに、実行委員会のメンバーが中心となり、数ヶ月ぶりに集まって、フィールドワーク、資料の作成、入所されている皆さんの訪問、参加者の情報交換と交流などを行っています。

毎回、20〜30代の若手を中心に、ベテランから初任者まで、多種多様な人たちが集まります。

私は中心となつている同年代のメンバーと自治会長の小鹿さんに出会えたことをきつかけに、3回目の参加となりました。

交流会でハンセン病問題に関心を持つ若者たちが2005年の「第1回

ハンセン病を知りたい青年交流会 in 栗生栗生園をきつかけに全国的にながりはしめたとの話を聞いて、カス。

トリックの青年が2005年の「ワールドユースデー・ケルン大会」をきつかけに全国的なネットワークを深めていった時のことを思い出しました。

青年活動は仲間内の親睦を深めるためではなく、次の信徒を養成しこれからの教会をつくるためにあります。

ハンセン病問題も終わつたことではなく、元患者の皆さんの将来や、何を伝えていかなければならないか、というのが今の問題です。

どちらか、これから先、私たちが何を考え、何をすべきかが問われているという共通点を感じます。その意味で、駿河の集まりが、ひとりひとりの自由な意思で、それぞれの思いを胸に集うという機会を大切にしていること、誰かに言われた通り従うのではなく、自分で考え、自分で行動す

く、自分で考え、自分で行動することを大切に行っていることに、魅力を感じています。

ハンセン病問題で「隔離政策による人権被害は、療養所に強制収容されただけでなく、周囲の人たちから排除されたことにもある」と学びました。

現代でも身内で固まり、「みんなそう思っている」と同調を求め、従わない人には暴言を浴びせ、立場を利用した誹謗中傷を行う人すらいます。

黒川温泉事件で謝罪を拒否した元患者側への誹謗中傷が、よい例です。

社会党教会の中で「みんな仲良くしたらよいのに」と目をつぶるのではなく、「舟を捨てて、御言葉や漁に出よう」と、服従や排除から離れ去ることで、イエスの教えに生きる信仰を示すことが大切ではないでしょうか。

（仙公教区人権を考える委員会

御供真人

あげながら登場された。その瞬間、巡礼者たちは、一斉に立ち上がり、歓声とも奇声ともわからないどよめきが起こつた。教皇様の服だけが真っ白で、すぐく目立っているのが印象的だった。

教皇様の一般謁見講話が静かに始まり、穏やかながらも、威厳に満ち、眼光鋭く、時々顔をあげて巡礼者を見ながら話された「写真上」。

講話の後、司会者より当日参加した各国の巡礼団の紹介があつた、それぞれの国名が呼ばれると、立ち上がつてパフォーマンスをする。コーラス、ブラスバンド演奏、大きな歓声などお国柄によつて様々。わが日本は、司会者に「ジャポネ」と指名されると立ち上がり、前もって手渡されていた日本国旗とバチカン市国旗を両手に持ち、遠慮がちに振りながら、「ビバパバ、ビバパバ」と叫び、日本の存在を訴えたが、いまいち迫力がたりなかった。



教皇様は、どの国のパフォーマンスにも、にこやかに右手を挙げて応えておられた。お人柄が表れているように感じ、印象的だった。

教皇様は、日本巡礼団に「福者ペトロ岐部と同志の列福一周年を記念するために来られた日本の司教と巡礼者の皆様を心から歓迎申し上げます」と英語で挨拶された。

謁見の終わりに、岡田大司教が、駐日教皇庁大使アルベルト・ボツタリー・デ・カステッロ大司教とともに、殉教者の聖遺物を納めた顕示台を教皇様に奉呈した。教皇様は謁見に参加した司教一人ひとりと言葉を交わされた。

この日の午後、サン・ピエトロ大聖堂を見学し、大聖堂の奥にある家庭の母聖マリア教会で感謝のミサが行われた。ミサ終了後、バチカン市国の行政長官ジョバンニ・ラヨロ枢機卿が来られ、日本からの巡礼団を歓迎するとの挨拶を述べられた。大司教は、2年ほど前、日本を訪れ大阪と京都を見て大感動され日本ファンになったと話された。

その後、バチカン博物館と、ステイーナ礼拝堂を貸し切りで見学した。私は、ミケランジェロの大作「最後の審判」を肉眼で見ることができ、その迫力に圧倒されしばらく棒立ちになって見入っていた。この日は、私にとって一生忘れることのできない一日となった。【写真は筆者夫妻と溝部司教】

「東北塾」開講

カトリック学校に勤務する先生のための
東北地区カトリック小中高連盟会長
(聖ドミニコ学院中・高校長) 佐野 督郎

仙台教区平賀徹夫司教は、東北地区カトリック小中高連盟が主催する「東北塾」において、新潟教区と仙台教区の各カトリック学校から参加した26名の先生を前に、カトリック学校は福音宣教の

最前線であり、教員一人ひとりが「自分の生」として大事な場として確認すること、子供たちの幸せのために自分を注ぎ込んで欲しい、カトリックを通して教育することこそ意義があるという確信を持って欲しい」と熱い期待を込めた挨拶を行った。



近年、シスターの高齢化や召命の少なからシスターがいなという学校も出てきており、そのことによって、カトリック学校らしさが失われるのではないかという危機感を各学校が持つようになり、それを乗り切るためには教員一人ひとりがカトリックを理解し、共感することこそ必要と考えた当連盟校長会が「東北塾」として将来の学校の担い手となる教員を対象に初めて開講したもの。その第1回

が旧冬の12月11日から13日にかけて、盛岡市のシャルトル聖パウロ修道女会・黙想の家で開かれ、来賓として平賀徹夫司教が招かれ、高松教区溝部脩司教、日本カトリック学校連合会理事長河合恒男神父サレジオ会らが講義を行った。

第1講は「カトリック学校の教員であることとイエスの弟子であること」と題して仙台白百合学園中高の土倉相づちくろおさむ教頭が行い、第二ヴァチカン公会議において提起された「信徒は使徒としての役割を担っている」というこ

はありえない」と説き、「神との共通点」を指摘しながら「主の祈り」の逐次の意味を語りかけるように話した。ついで聖堂でのミサを通して実践的祈りの体験とその意味について懇切丁寧な指導が行われ、一人ひとり肅々とした祈りの姿勢を取った。

第3講は「カトリック学校として大切にしたいこと」と題して河合恒男神父が講壇に立ち、「先生達ご自身が、先生の家族が満足するカトリック学校でなければならぬ。そうでなければ生徒は満足しない」と切り出し、自己の教師活動を振り返りつつ、常に「私たちのカトリック学校は何なのか」というベクトルづくりに取り組まなければならないと力説した。そのベクトルの軸は「イエスの生き方を伝える」ことであり、伝えたことの完成品モデルは「聖母マリア」であると説いた。

第4講は聖ドミニコ学院中高の高橋延一(のぶかず)進路カウンセラーが「カトリック学校のミッションと学校経営」と題して「ミッションについて考える」「福音とは何か」「キリストの教えとは何か」「福音的人間観とは何か」「全人教育とは何か」などの命題をた

たみみかけるように設定し、歯切れのよい解説が行われた。特に未信徒の教員にとってはかなりの説得力を持つ内容であった。

第2講は溝部脩司教が担当し「主の祈り」を解説した。まず「祈り」とは「神様との対話」であり、教員としては「こども抜き祈り

第5講では元仙台白百合女子

大学学長Sr.飯山義子による「ミサの構成について」の講話を行い、ミサの進行に合わせたそれぞれの意味合いを分かり易く解説し、聴講生がこれまで持っていた疑問や誤解を氷解させ、共有できたという雰囲気は講義室に漂った。

第6講は再び溝部司教が立ち「カトリック学校の現状認識と今後の課題」と題して講話が成された。その第1章は「カトリック教育史」第2章は「プロテスタント教育史」第3章は「キリスト教学の転機」第4章は「カトリック学校とプロテスタント学校の差異」そして終章として「カトリックのビジョン」という構成であった。特にミッションスクールという言い方は1890年以降に來日したミッションボード(プロテスタント宣教団)によって作られた学校を指すものであり、カトリックはそのことを検証しないま



まミッションスクールの名を使っているという解説は聴講生の耳をそば立たせるものがあった。第6講は今回の塾のまとめでもあり、次回へと発展させる布石の意

味を持った内容であった。この講義の合間に聴講生の事前提出レポートによる分かち合いや各校の現状についての情報交換が行われた。

塾の最後に参加した感想を述べ合うまとめの分かち合いがあり、その意見の集約として「カトリック学校の教員として確認すべきことが確認でき、カトリック学校の教員として勤務すること」に確信を持つことができたというものであった。さらに「自分たちは一人ではない、多くの仲間たちがおり、今後折に触れ情報交換ができるネットワークが作られた」という望外の意見も述べられた。

東北塾の第2回目は2010年度中に開かれるが、より若い人材にも門戸が開かれる様子である。この東北塾の手法は森一弘司教が東京で開いている「養成塾」にあるが、地区の各学校が連携して開講したのは初めてのことであり、開講の意義や立ち上げの手順についての問い合わせが東北塾事務局である聖ドミニコ学院中高にあいついでいる。今後このようなカトリック学校のアイデンティティ確保のためにカトリック学校が独自に企画する研修会は全国的な広がりを見せる様相であり、その先駆けとなった東北塾の一層の充実が期待されている。

各地から

青森県 十和田教会

地域に根差した宣教共同体

十和田地区は、最も寒い二月に突入しましたが、雪国ではなによりも冬が美しい季節です。夜半に雪が降った翌朝の、寒さで引き締まった輝かしい風景は、また格別です。

十和田教会は、昨年から地域に根差した宣教共同体になろうと、皆で励んでいます。というのも、この教会は百年以上の歴史があるにもかかわらず、地域の方々はそれほど密接に関わっていません。たとえば、カトリック幼稚園は（私もOBですが）その保育を通して確かに地域に根付いてきたのですが、一方の教会で日曜日毎にミサが行われているということがあまり知られていなかったというのが正直なところです。



私は妻（フィリピン人）がカトリックなので、昨年の1月から夫婦一緒にこの共同体に参加しています。

昨年4月に佐々木博神父様が当地にいらしてから、手始めに幼稚園と共同で夜も明かりがつく看板「写真」を掲げました。また、夏場は聖堂の扉をいつも開けたままにして、誰でも気軽に中に入れるようにし、「案内のしおり」も準備しました。門を



入った正面には「いつくしみの聖母」の真つ白な母子像「写真」を建て、小さな屋根も架けました。ミサの前に鐘を3分間鳴らすことも始めました。私も交代で担当しています。

昨年のクリスマスには、ポスターやちらしを用意し、市民に本当のクリスマスの意味を広くアピールしました。さらに、より多くの人たちに夜半のミサへの参加を呼びかけた結果、聖堂は二階の席まで満席になりました。

これからどのような宣教共同体に成長していけるのでしょうか、と神父様にお聞きしたところ、「主日のミサを行うだけでなく『聖書教育』と『典礼教育』という二本の柱を大切にしていこう」と教えていただきました。

そのため、毎月一回ずつ、ミサの後に、聖堂で全員参加の「聖書の学び」と「典礼研修」が行なわれています。さらに、毎水曜日の午前中に「聖書講座」も始まりました。

勤務の関係で私は参加できませんが、とても興味があります。また、同じ敷地内にあるカトリック幼稚園の園児と教職員にも毎月聖書のお話をなさっています。

初めての方も参加しやすい雰囲気、共同体の一員として神父様と共に大切にしていきたいと思っています。（佐々木 誠）

宮城県 八木山教会

「小さな教会の小さなクリスマス」

教会が焼失して10年がたった。新しい教会は仮小屋の教会ということ、で、「新生」をテーマに建立された小聖堂である。聖堂はあるが香部屋もない。まして信徒の控室もない。ミサが終わると、そこが信徒の集会場



になる。この教会で今年もクリスマスを迎えることができた。

土曜学校の、小中学校の生徒が、毎年行う小さなクリスマス

舞台は信徒の輪の中にある小さな空間。30分間の小劇は、

今年も行われた。

お生

れにな

たイエ

様やマ

ア様と

一体感

この子

もたち

真剣な

喜

びの中

から湧

きあ

がって

く

告知板

★＜テゼの祈りに来ませんか＞

「テゼの祈り」は、フランスのテゼ村ではじまった歌のお祈りです。短く単純な歌を何回も繰り返すことで心を合わせ、祈りを深めていきます。歌が苦手な人でも大丈夫、難しいメロディーではありません。キリスト教信者でなくても大丈夫。心静かなひとときを一緒に過ごしてみませんか。

〔日 時〕3月12日(金) 午後7時～午後8時30分

〔場 所〕福島市 カトリック松木町教会

〔連絡先〕定方 一悦 024-545-6851

Sr. ラマーシュ 024-534-4412

〔主 催〕カトリック松木町教会「いずみとぶどうの会」

★＜春の後藤寿庵豊作大祈願祭＞

〔日時〕2010年5月30日(日)午前10時

〔場所〕岩手県奥州市水沢区福原 寿庵廟前

カトリック水沢教会寿庵祭実行委員会



指導してくださる佐々木さんは元小学校の先生、リーダーは仙台市内の大学生たち。そしてダビデ神父（グアダルペ外国宣教会）、ロドリゴ修道士（ラ・サール会）に囲まれて、子どもたちは小さなクリスマスで喜びの声を上げた。信徒たちもミサにあずかり輪になって喜びに浸った。（竹内 哲子）

「ベトレヘムの星になったダビデ神父

各地から

福島県 原町教会

19年ぶりの堅信式

2月14日(日) 原町教会では、平賀司教様を迎え、二人の信者の堅信式が行われました
写真。

原町教会で堅信式が行われたのは、1991年以来のことです、1年ぶりということになります。

堅信を受けられたのは87歳の田中さんと、昨年事故で亡くされたお子さんの導きでこの日を迎えることが出来たという高橋さん。

お子さんの写真と共に堅信の秘跡にあずかり、お二人とも

私の気分転換

四ツ家教会 湯口 靖彦

振り返ってみると私たち夫婦はその時々色々な気分転換をしてきたと思います。その中で最大の息抜きは定年と言う節目にピースボート主催の世界一周の船旅に夫婦で参加したこと。この体験で私たちはまさに人生の気分転換をして新たな定年後の人生をスタートさせることができました。

最近の日常的な気分転換は

感謝の気持ちでいっぱいということでした。(若原 裕代)



エルサレム第二神殿の模型

大船渡教会 山浦 玄嗣

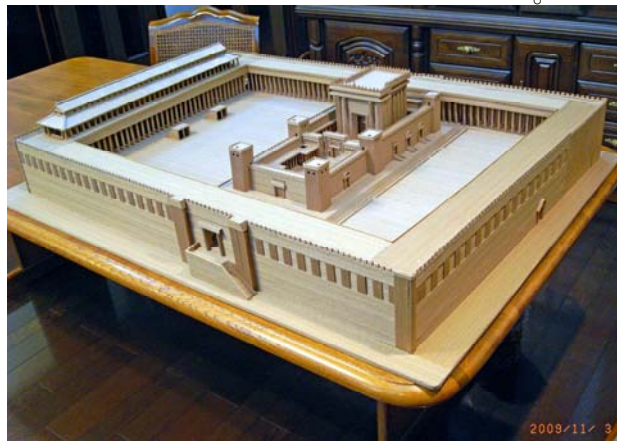
聖書を読んでみるとイエスさまがエルサレムの神殿を舞土曜日、夫婦で岩手山の麓にある温泉でのんびり過ごすことです。着いて早々に浴場に向かいます。湯船に浸かっている間は身も心も溶け出すような快感を味わえます。湯上がり後の冷えた牛乳は、五臓六腑にしみ渡っていきます。大げさに言えば生きていることを実感する瞬間です。後は本を読んだり、昼食を食べたり、昼寝をして半日過ごします。これで



私たち夫婦のミサにあずかる準備が整います。

台に大活躍なさる様子がたくさん書いてあります。でも、その神殿が具体的にどんな建物なのか、読むだけではよくわかりません。それで神殿の模型を作ろうと思い立ちました。

ソロモン王が建てた第一神殿がバビロニアによって破壊され、捕囚後に再建された第二神殿をヘロデ大王が大改修したのがイエスさま時代の神殿です。これもローマによって徹底的に破壊されました。古文書や考古学的研究に基づいてかつての姿が推定されています。



まず設計図を作製することから始めました。縮尺1/400。材料は荷造り用の紙紐です。これを木工ボンドで貼り合わせて作りま

す。大きさは3尺×4尺。周囲の回廊の円柱は685本。結構苦労しましたが、楽しい作業でした。工期100日で完成。一人で祝杯。

【エルサレム第二神殿】バビロン捕囚から解放後の紀元前515年に再建された神殿。現在残っている西壁が、いわゆる「嘆きの壁」と呼ばれている。



新刊案内

『カトリック教会のカテキズム 要約 (コンペンディウム)』

訳者 阿部仲麻呂 櫻井尚明 澤田豊成
監修者 日本カトリック司教協議会
常任司教委員会/発行 カトリック中央協議会/定価 1200円+税

本書は、2002年に日本語が完成し、発刊された『カトリック教会のカテキズム』を忠実に問答形式で要約したものです。

『カトリック教会のカテキズム』が公布されてから、この本を読んだ多くの

人々から、手軽に使用できる要約版を作つてほしいという希望が、時の教皇ヨハネ・パウロ2世に出されました。

ヨハネ・パウロ2世は、時の教理省長官ヨゼフ・ラツツィンガー枢機卿に、すぐに要約の作成を命じられました。その後、教皇ヨハネ・パウロ2世の逝去により、ヨゼフ・ラツツィンガー枢機卿が教皇に選出され、教皇ベネディクト16世と名乗られました。

ですから、今回公布された本書には、ヨゼフ・ラツツィンガー枢機卿名で序文がつけられており、教皇ベネディクト16世の自発教令『カトリック教会のカテキズム要約』の認可と公布が付けられています。

カトリック教会には、昔から、『公教要理』という問答式の要理書がありました。カトリックの教えを学んで信者になった人々の中には、この『公教要理』がなつかしい、という方がいらつしやいます。生涯教育の一環として、新たに